

7 六朝建康城の主要発掘調査成果

王 志 高
(南京市博物館)

A はじめに

六朝建康城は、同時代の北魏洛陽城、東魏北齊鄴城、朝鮮半島、日本の都城および隋唐都城の設計と造営に多大な影響を与えており、わが国の古代都城の発展史においては後世の発展につながる重要な役割を果たしてきた。しかし、隋が陳を滅亡させたのち、建康城は削平と開墾によって城壁や壕、宮城の建物などが大きく破壊された。そのため、少なくとも明代以降、六朝の建康宮城（台城）の位置と都城の構造を含めた多くの問題は、すでに難解な謎となっていた。

南京は典型的な重層型の都城で、六朝以来の都市の中心区と空間配置は大きくは変化していない。新しい都市は旧都市の上に造営するため、古い遺跡を破壊せざるをえなくなる。一代の名城、六朝建康城は現在の市街地の下に深く埋没しており、大規模なボーリング調査や発掘を実施することは難しく、その研究の進展には制約がある。こうした状況から、漢唐長安城、漢魏洛陽城などの著名な古都にくらべると、六朝建康城遺跡の発掘調査と研究は手薄で、中国古代都城の研究においては大きな空白部分となっていた。

近年、都市化が急速に進展するとともに経済発展も加速し、南京の市街区における大規模な都市建設は、都市の景観を大幅に変えるだけでなく、大量の建設工事で地下を浸食するため、六朝建康城遺跡の探究と発掘調査にとっては大変な危機である。建康宮城の位置を究明し、都城の構造などを明らかにするために、2001年5月から南京市博物館考古部は、都市開発計画が六朝建康城の範囲に及ぶような成賢街、大行宮ほか 30 数ヵ所の工事現場において緊急の発掘調査を実施した。こうした調査によって多くの成果を獲得し、六朝都城を千数百年覆っていた神秘的な覆いをはぎ取ったのである。

B 六朝建康城の重要な発見

広義の六朝建康城とは、宮城、都城、外郭の三重の城壁と壕を含み、さらに周囲には石頭城、西州城、東府城、丹陽郡城、越城、白下城などを代表とする衛星都市群を含んでいる。さらに、その間に広く分布している礼制、宗教、官衙、市場、里坊、庭園などの各種の建物、および都市交通の命脈である道路や水路などがある。したがって、六朝建康城遺跡の考古学的な調査や発掘と研究は体系的な仕事であり、なかでも建康宮城（台城）はその核心である。

これは宮城に当時の建物や芸術の粋が集中しているだけでなく、宮城の位置の問題がいったん確定すると、その他も問題も解決していくからである。ゆえに、宮城は六朝建康城考古学の第一の課題であり、問題解決の突破口でもある。

六朝建康の宮城遺跡の探究と発掘調査は、前後2段階に分けられる。最初の段階は、おもに伝統的な見解にしたがって、台城の北は北京東路、南は珠江路、東は珍珠河、西は進香河にのぞむ今の東南大学と成賢街地区と理解していた。そして、この地区に位置する旧老虎橋監獄、成賢街西43号大院、北京東路南側、東南大学校地北部科技楼、成賢街東側星漢大厦、成賢街東側東南大学成園、成賢街東南浮橋、珍珠河東側、珠江路北側の華能都市花園など多くの地点で発掘調査を実施した。華能都市花園以外の場所で、珍珠河西側のいくつかの発掘地点では六朝文化層が比較的薄く、六朝建康宮城ないし都城と関連する遺構は発見されなかった。これは、台城がいまの東南大学と成賢街地区に位置するという伝統的な見解を、考古学が否定したことになる。

次の段階では、調査の重点が今の太行宮とその周囲に移された。太行宮地区の考古学的調査と発掘は2002年3月から開始し、2007年12月に終了するまで、この地区の近代史博物館、市民広場、日月大厦、華夏証券大厦、新世紀広場、南京図書館新館、市体育局、鄧府巷東西両側広厦公司、延齡巷、利濟巷西長發大厦、游府西街小学校、長江後街、省警察博物館、省美術館新館、南京テレビ大学、省タバコ公司等の建設工事にさきだつ調査地点20数カ所で、大規模な発掘調査をおこなった。太行宮路口東南、太平南路東側の新世紀広場の現場でめざましい成果をえて、その北側の南京図書館新館、利濟巷西長發大厦、鄧府巷東西両側広厦公司の現場でも六朝時代の重要な遺構を検出した。

それらの遺構には、道路、城壁、壕、木橋、大型版築基壇、磚積みの建物遺構、排水溝、磚組み井戸などがあり、遺物では各種の瓦当、釉下青磁などの精美な製品がある。これまでの六朝建康城の発掘では、もっとも重要な成果である。その規模や格などは尋常ではなく、出土した磚の銘も、これらの遺構が台城と関連があることを示している。以下、主要な成果を紹介していきたい。

(i) 城壁、壕

台城の東南隅の城壁と壕の遺構 長江路南側にある南京図書館新館予定地の北部に位置し、2002年8月から2003年5月まで発掘調査した。そのうち、東西方向の城壁の使用期間は東晋から南朝まで3段階あり、各時期の城壁の外側には外装の磚積みが残存している。前期の城壁地業部分は幅12.4m、深さ1.4m。後期の版築城壁は0.7mの高さで残っている。

版築層は、きれいな土で、厚さ5~10cmほどある。掘込地業は、繰り返し木杭で版築し、城壁内側の裾部分には未加工の大きな石が1層埋め込まれていた。南北方向の版築城壁は、改修とともに次第に幅を増していく。後期段階の城壁は幅13.15m、残存高0.1~0.45m、城壁外側には長さ11.5mの外装の磚積みが比較的よく残っている。磚の積み方は、2つの磚を

縦に平置きし、1つの磚を立てて積む方法である。

後期の城壁東側の拡張部分は、東晋と呉の道路側溝の上に構築されている。ここは地盤が軟弱なので、拡張部分の掘込地業は2～3mおきに版築土台を築いている。検出した4基の版築土台は平面凸形を呈する。断ち割りしたところ、東側に長さ2.14m、幅1.5m、深さ1.7mの土坑を掘り、その底部に厚い木板を1枚敷く。そのうえに割れた磚をつかって長さ0.9m、幅0.68m、高さ0.7mの磚の台を築く。さらにそのうえに土を盛り、版築して土台をつくる。土坑の西側に連続するのは長方形の土坑で、長さ3.84m、幅0.88m、深さ約1m。土坑の西側に長さ1.15m、幅0.7mの木板を敷き、その上に版築して台をつくる。

東西方向の城壁の外側では、数時期にわたる壕が発見されている。南朝の壕は幅5.6m、深さ1.1m、護岸の磚積みを部分的に検出した。呉の時期の壕は幅9.75m、深さ約2m。両岸に護岸の木杭がある。上述の2ヵ所の城壁の規模、構造、周囲にある関連遺構の状況から判断すると、これらは台城内の2重目あるいは3重目の城壁の東南隅である可能性が高い。

台城の最外郭城壁の東壁と壕 利濟巷西側の長發公司建設予定地の東部に位置し、2003年8月から11月まで発掘調査した。発見した南北方向の城壁の使用期間は、呉から南朝までの4段階にわけることができる。もっとも新しい段階の城壁は幅24.5mにも達し、残存高0.15m、掘込地業の深さは0.7m～1.4mある。城壁中部の土は比較的きれいな版築層で、ごく少量の瓦磚の破片を含む。城壁の両側には外装の磚積みが残る。内側の磚積みは残りが悪く、外側の磚積みには2種ある。下部の4層は磚が比較的小さく、長さ33cm、幅17cm、厚さ5cmであるが、上層1層の磚は長さ49cm、幅24cm、厚さ7cmある。

各時期の城壁の外側には壕があり、もっとも古い時期の壕は幅17.25m、深さ2.5m。後期段階の壕は城壁から14mほど距離がある。しかし、壕の東岸は利濟巷東側の城南電局大行宮変電所大楼の地下にあるので、正確な幅はわからない。文献の記載と結びつけると、この城壁は、台城の最外郭城壁の東壁に違いない。

台城の最外郭城壁の西壁と壕 長江路以南、鄧府巷東側の現場に位置し、2007年10月、2008年1月に発掘調査した。壕は南北方向で、呉から南朝までの数時期に分けられる。もっとも古い壕の西側は鄧府巷道路の下に位置し、幅は不明である。新しい壕の西側は、細かく砕いた石を積み上げた護岸の痕跡が残存しており、幅約18.5mある。壕の東側には同時期の版築の城壁があり、その外側には外装の磚積みが残る。しかし、城壁の東側は調査区の外になるので、城壁の幅はわからない。

台城の最外郭城壁の南壁と北壁については未確認である。しかし、東西両壁の状況と文献記載を総合すると、比較的正確な推測が可能である。台城の北は、現在の如意里と長江後街を結ぶ線にあたり、南はだいたい游府西街、文昌巷北側の線であろう。これらをつなげた台城の範囲は南北がやや長く、東西が短い方形で、四面の城壁の長さを合計すると、文献に記載のある周八里（今の3499.2m）にほぼ一致する。

（ii）道路、橋、水門

南北方向の道路 4 本 もっとも重要なのは南北方向の道路で、新浦新世紀広場建設予定地の北部に位置し、方向は南で 25 度西に振っている。この道路の北は、現在の中山東路、長江路をこえて南京図書館新館予定地、省警察博物館予定地に至り、呉から南朝までのいくつかの時期の路面が重なっている。道幅は時期によって東西に移動しているのが明らかで、東晋時期の道路は、呉時代の道路を基礎として西に 6 m 移動している。南朝の道路は東晋の道路から東へ 10m 近く拡張している。

各時期の道路の両側には、幅の一定しない磚組みの側溝があり、もっとも古い呉の時期の側溝がいちばん狭い。路面幅 15.4m にたいして、側溝幅は 5m 以上、深さは 2 m 以上ある。路面にも 2 条の浅い溝があり、それによって道路は 3 つの部分に分かれている。南朝時期の道路がもっとも広く、路面幅 23.3m に達し、磚組みの側溝幅は約 2 m、深さ 0.6m である。東晋時期の道路にも「一路三途」の現象がみられる。

新浦の現場の東晋道路の両側の路面は磚敷であり、路面には轍の跡が明確に残っている。一方、中央の路面は版築の路面である。磚に刻印された紀年の銘文によれば、この磚敷の道路は東晋の成帝と康帝の時期にあたる。近年の発掘成果からみて、この道路は台城東側の主要幹線道路であろう（図 1・2）。

このほか、利濟巷西側の長發大厦建設予定地、洪武路東側の南京放送大学予定地、中山東路北側の市体育局予定地で、それぞれ南北方向の立派な道路を発見した。道路の両側にはやはり磚組みの側溝がある。市体育局で検出した道路は幅 17m をこえ、南朝時期の道路側溝は東晋の側溝の磚のう上に磚を積み足して構築している。

東西方向の道路 1 条 南京図書館新館予定地の北部に位置し、この現場と南北方向の道路とは直交する。呉から南朝までの各時期の路面が重なっている。古い時期の南方の道路は、新しい時期の路面によって破壊されており、幅は不明である。南朝後期の道路は残りがよく、路面幅約 20m、両側には磚組みの側溝があり幅 0.85m である。

六朝前期の木橋 南京図書館新館予定地の北部に位置し、東西方向の壕と南北方向の道路とが直交している。橋の床板は残っていないが、橋脚の木杭はよく残っている。2 列 6 本の木杭が検出され、いずれも壕のなかに打ち込まれている。杭の配列からみて単孔の木橋で、東西幅 4.7m、橋孔の南北間隔は 4.5m ある。橋脚部分の壕の両岸には、比較的太い護岸の杭がある。北岸の橋脚の杭と護岸の杭との間では、残存長 4.6m の橋をまもる磚積みの壁が発見された。幅 0.8m、残存高 0.1～0.55m。南側の橋脚と壕南岸との距離は 3.8m あり、その間には砕いた石や磚をつめ、さらに木の枝や大量の大きな石をつかった構築物があり、南岸の橋の保護を強化している。

水 門 鄧府巷東側の広厦公司予定地にあり、東西方向にこの現場を貫く城壁がある。検出した部分は東西長 16.8m。頂部はすでに破壊されている。構造の違いから 3 段に分けられ

る。東段は幅 2.2m。両側の溝壁は木板をもちいて木杭で護岸し、溝底には木板を敷いている。中段は幅 2.1m。両側の溝の壁は磚積みで、その壁の下部の内側には、さらに木板をもちいて木杭で護岸を強化している。溝底には木板を敷く。東段と中段の溝底と溝壁の木板と木杭は、ほとんどが腐食していたが、痕跡が残っていた。西段は、東段や中段より幅がひろく、内法幅 2.4m、残存深 2 m。両側の壁には大きな磚を組み、底には長い木板を階段状に敷く。排水の方向は東から西へむかっていたと推測する。

(iii) 磚組み住居址と大型の建物基壇

磚組み住居址 10 基ほど発見した。多くは南京図書館新館の場所である。建物の規模や形はさまざまで、最大の F8 を例にすると、南北幅 12.5m、東西残存長 13.5m ある。柱穴の配置とその他の遺構の状況から、F8 は間口 5 間、奥行き 3 間で、北壁の中央には幅 2.1m の出入り口があったと考えられる。磚組みの壁の中には磚敷の活動面があり、壁の外側には犬走り一周して、その外側に磚敷の雨落ちと排水溝がある。

南朝の大型基壇 長江後街南側の現場に位置する。発掘面積に限りがあったため、遺構を全面調査していない。ボーリング調査の成果と総合すると、この基壇は少なくとも南北 50m 以上あり、北は長江後街の地下に達している。東西は 38.4m 以上あり、西は太平北路の下に至る。後期の版築基壇は、前期の基壇を基礎として、さらに外側に拡張している。拡張部分の版築は 8～10 層に分層でき、厚さは 6～20 cm。版築層の間には、規則的に敷かれた石がある。版築基壇の上面では、2 つの南朝時期の大型の礎石が検出された。この基壇の規模は非常に大きく、おそらくは宮殿の基壇であろう。

(iv) 磚組みの排水溝と磚組みの井戸

磚組みの排水溝 おもに南京図書館新館予定地と游府西街小学校予定地で検出した。比較的密集した住居址の間にある。ほとんどが明渠で、1 条は当時の道路をこえるために、道路下の部分だけ磚を積み、天井を設けて暗渠にしている。溝の両壁にも磚を積む (図 3)。

東晋および南朝時期の磚組み井戸 十数基ある。ほとんどの現場で発見されており、よく残っている。井戸の底はすべて木板を敷き、壁には磚を積み上げる。ただし、一部の井戸壁では、底の木板の上に磚を積み上げた特製の灰陶壁を構築しており、その壁面には 4 ヲ所の入水口が設けられている。ほとんどの井戸の中から、壊れた方形円口の石製井戸枠が出土し、またある井戸の開口部分の周囲には、方形の版築基壇があって、その四隅に柱穴が発見された。おそらく、井戸の覆い屋であろう。また、別の井戸の周囲には、2.2m×1.9m の範囲を磚敷にした井戸周りの足場を構築しており、特殊な例である (図 4)。

C 建康城の主要成果

大行宮地区の六朝建康宮城遺跡をのぞいた、六朝建康城の範囲内にある建設現予定地の遺構について緊急調査を実施し、重要な成果をあげたので以下に紹介する。

- 1 2002年9月、鼎新路中段紅土橋の西側にあるもとの建鄴区国税局大楼の現場で、南朝の陶製の仏像の破片が発見された。一部の像には施釉の痕跡が残っている。同時にこわれた窯壁の破片も出土しているので、窯の廃棄物が堆積した場所であろうと考えられる。文献を参照すると、付近には寺院が分布している。
- 2 2004年4月、城南の秦淮河南岸の船板巷そばにある皇冊家園の現場で、南朝の磚組み井戸と整然と配列された木柵、おそらく軍事施設の一部を検出した。大量の六朝前期の青磁や鉄鏃、鉄の甲冑片などが出土し、そのなかには釉下彩絵で蓋つきの青磁双領罐と40数点の木簡が含まれている。
- 3 2004年4月～6月と12月、鄧府巷の西側にある広厦公司建設予定地と程閣老巷と洪武南路の境界の西南側の現場で、南北方向の東晋から南朝時期の道路を検出した。
- 4 2006年6月～9月、中華門内信府河巷の現場、建鄴路中段南側の金鼎湾の建設予定地で、秦淮河の旧河道と古い運河遺構を発掘し、2条の河道の六朝時期における幅を確認した。
- 5 2007年3月～5月、中華路東側の中華広場の現場で、幅の広い南北方向の道路を1条発見した。位置は南唐時代の御道の東側にあたり、呉の時代から唐代まで使用されたもので、おそらくは六朝都城の宣陽門と朱雀門を結ぶ御道と考えられる。

D 建康城の主要な遺物

(i) 瓦 磚

六朝建康城の発掘調査で出土した遺物には、土器、陶磁器、銅器、鉄器、石器などがある。そのうち瓦磚がもっとも多い。各種の軒丸瓦は計800点をかぞえ、文様は雲文、人面文、獸面文、蓮華文の4つに大別される。六朝の軒丸瓦に関するもっとも重要な成果である。瓦当の型式は豊富で、出土層位が明らかなことから、従来、採集品を主としてきた六朝瓦当の研究を改変し、きわめて豊富な六朝瓦当の出土品を提供した。六朝瓦当の分類と編年研究において重要な科学的根拠となる。

2004年以前に出土した雲文、人面文の瓦当資料は、すでに整理して、『文物』2007年第1期に発表している。獸面文と蓮華文瓦当は現在整理中である。出土した多くの磚の側面と端面には、各種の文字や図案が刻印されている。その内容は紀年、記事、方位、用途、姓名など豊富で、各種建物遺構の具体的時代や性質について検討する際の手がかりとなる。

(ii) 釉下彩絵磁器

城南の秦淮河南岸の船板巷のそばにある皇冊家園の現場や大行宮地区の新浦新世紀広場の現場、南京図書館新館の現場で発見されている。蓋つきの青磁双領罐と盤口壺が修復できたほか、三十数点の破片があり、器形がわかるものには洗、盞と盞がある。時代は呉時代後期である。これらの釉下彩絵磁器は、出土層位が明らかで時期的な特徴も明確で器種も多い、

彩絵の内容也多岐にわたり、非常にすぐれたつくりである。これは長岡村5号墓以来の重大な発見である。これらの磁器は、胎土や釉、製作技術も同時代の一般の青磁にくらべて優れており、その装飾も独特で華麗であり、当時の一般の磁器とは顕著な差がある。おそらく、呉の宮廷のために特別に焼成された高級な容器であったのだろう。これらの釉下彩磁器の資料は『文物』2005年第5期に発表したのち、学界で大きな注目をあびた。

(iii) 木 簡

城南の秦淮河南岸の船板巷のそばにある皇冊家園の現場で発見された。地表から4mほどの深さの古秦淮河の堆積層から大量の六朝時代の遺物が出土し、そのうち釉下彩絵で蓋つきの青磁双領罐と四十数点の木簡は大変貴重である。これらの木簡はみな木質で、出土層位と共伴した遺物をみると、呉、西晋の時期にあたる。数点の木簡には正確な紀年があり、呉の年号である赤烏元年(238)、赤烏13年(250)、永安4年(261)の3種、西晋の建興3年(315)があり、時代の確定に重要な根拠となった。木簡の種類には、名刺、荷札、符券牌、封検などがある。内容は豊富で、名刺以外に米や食糧の貢納、道教の符など、当時の経済、宗教、および地名や官職の研究にも重要な史料となる。これらの木簡の一部については『書法叢刊』2005年第3期に発表した。

E 今後の調査の重点

目下のところ我々は、六朝建康宮城(台城)の中心位置、台城の東辺、西辺、台城内部の城壁や道路の配置の把握、瓦当や釉下彩絵磁器を代表とする遺物の研究について、大きな進展をみた。しかし、現在発掘で明らかにした遺構は、埋没している六朝建康城遺跡の氷山の一角にすぎない。解決すべき問題、完成すべき重要な調査研究は山積している。六朝都城の発掘調査の全面的な展開を積極的に推進するために、できるかぎり早く既定の学術目標を実現し、今後の調査研究の計画と調整を実行すべきであると考えている。

- 1 発掘資料が増加し、城壁や壕などの重要な遺構の性質が明らかになるにつれて、これまでの発掘資料を体系的に整理し、消化してその成果を公表しなければならない。
- 2 目下、取得した手がかりにもとづいて、重要な建設現場をひきつづき発掘調査し、早急に宮城の北限と南限、城門の形や内側の城壁の構造などを確認する。台城の四至がほぼ明らかになった状況下では、当時の財産、知識と技術を集中して造営した最高級の建物、宮殿基壇の解明を今後の発掘調査の重要課題の1つにしたい。
- 3 資料不足により、六朝建康都城の四至、城壁の構造、都城内の空間構造などの重要な問題について、学界では定説がない。したがって、都城の城壁、道路などの遺構の発掘調査を開始する必要がある。
- 4 宮城と都城以外にも、建康城の周囲には多くの衛星都市があり、その間にも各種の建物が分布している。これらもまた建康城の発掘調査の重要な課題である。現状では

石頭城、西州城、東府城などの主要な城址、仏教寺院を代表とする宗教関連の建物などを選択し、優先的に調査することができる。

- 5 六朝建康城の保護事業は、発掘調査と同様に重要である。中国古代都城発展史上における六朝建康城の位置を考慮し、その保護事業を都市計画と法制管理の軌道に乗せる必要がある。当面、発掘調査計画を見直し、南京市の埋蔵文化財の重点保護対象である六朝建康宮城の具体的な保護範囲を早急に作成する。台城外周の建康都城および石頭城、西州城、東府城、越城などを代表とする主要な城址の地下にも大量の遺構が埋没している。それらが都市開発で破壊されるのを防ぐために、法律をつくり保護する必要がある。当然、都市計画の実際の状況を検討し、各城址の重要な程度や緊急性の違いを考慮したうえで、適切な保護措置をとる。

発掘した重要な建物遺構については、過去にも若干の保護措置をおこなってきた。たとえば、新世紀広場で発見した東晋時代の磚敷きの車道のなかの一部や南京図書館新館で検出した磚組みの井戸、南朝の城壁などは全体を南京市博物館に移設、展示している。また、南京地下鉄2号線大行宮駅の現場で発見した南朝の磚組み井戸、鄧府巷東側の現場の磚と木で構築した南朝の水門も、建設工事終了後に現地に保存展示した。南京図書館新館の東部の地下1階ロビーの下にも六朝建康宮城の建物遺構を現地保存展示している。これらの保護事業は社会的にも認められ、高い評価を得ている。

しかし、さまざまな理由で、重要な遺跡の保護事業に対する関心は、関連部門においても十分とはいえない。一部の遺跡が、発掘終了後に埋め戻されるか破壊されていることには遺憾の意を禁じえない。今後、重要な遺跡の保護や展示については継続的に強化するとともに、さまざまな方法でさらに多くの遺跡を保護し、六朝の古都南京のために、名実ともに六朝文化の新景観を現出できるよう努力しなければならない。

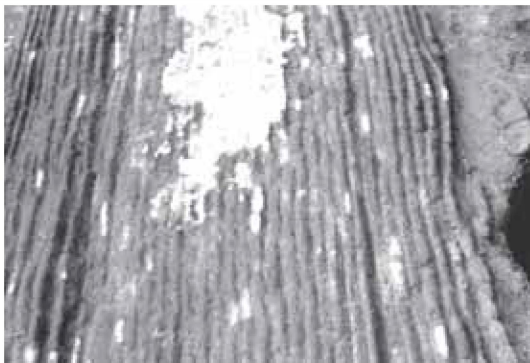


図1 東晋時期の磚敷車道（細部）



図3 南朝時期の磚組み井戸底部の水穴



図2 南朝時期の磚組み排水溝



図4 新浦新世紀広場 東晋時期の磚道